

日系アメリカ文学をめぐって

—— 代表的日系二世作家たちとその作品 ——

山 本 秀 行

1. は じ め に

(1) 日系アメリカ文学をとりまく状況

1960年代以降のアメリカでは、女性／少数民族（非白人）の社会的地位の向上や権利拡大と歩調を合せるようにして、従来の男性／白人（特にWASP）優位の文学史を再構築すべく、いわゆる文学のCanonの見直しが進められてきた。そのような流れの中で、日系アメリカ文学（Japanese American Literature）はアジア系アメリカ文学（Asian American Literature）という枠組の下、多く学会や文学研究者（特にアジア系アメリカ人の研究者）によって認知され、研究が進められている。特に1970年代になってからは、アメリカの社会概念が多民族の同化主義（assimilationism）から多元文化主義（multi-culturalism）へと変わるにつれて、文学研究においても、その風潮が顕著になってきた。1970年代半ばから後半にかけて、アジア系アメリカ研究のためのJournal *AMERASIA*や多民族主義的文学研究のための季刊誌（quarterly）の*MELUS*（*Multi-Ethnic Literature of the United States*）が発行されたり、1980年代初めからアメリカ最大の言語系学会MLA（Modern Language Association）が、多民族主義という視点から見たアメリカ文学のハンドブックや研究書等を出すようになってきた。1990年にMLAが出した*Redefining American Literary History*は、そのような姿勢がこれまで以上に明確にされている研究書である。¹⁾また、最近になって、アジア系アメリカ人作家の作品が大学出版局（university press）からだけでなくアメリカの大手出版社からも出版されるようになってきた。例を幾つか挙げれば、Joy KogawaやDavid Muraの作品が、Doubledayから出されたり、Cynthia Kadohataの作品が、Random Houseから出されるなど枚挙にいとまがないほどである。²⁾

さて、日本に目を移すと、アメリカよりかなり遅れていることは否めないが、1980年代後半ごろから徐々に、アジア系アメリカ文学研究が活発になり、1989年に神戸女子大学の植木照代教授らによって我が国初のアジア系アメリカ文学の専門学会、アジア系アメリカ文学研究会が発足されて以来、その研究は本格化し、裾野も広がってきた。³⁾近年、この研究会のメンバーを中心に、全国規模の学会でのこの分野についての研究発表等もめざましい。ごく最近の例を挙げれば、1993年度日本英文学会全国大会ではアジア系アメリカ文学に関するシンポジウムが行なわれたり、1994年度日本アメリカ文学会全国大会でも日系作家や中国系作家についての研究発表が行なわれたりして、この分野の研究についての研究者レベルでの認知度が急速に高ま

っている。日本におけるアジア系アメリカ文学研究は、今まさに、これまでにないほどの盛り上がりを見せていると言っても過言ではなからう。

(2) 日系アメリカ文学概観

前に述べた通り、一般的に日系アメリカ文学はアジア系アメリカ文学の中の一部門として扱われている。そもそも、アジア系アメリカ人というのは、中国系、日系、フィリピン系、インド系といった移民の時期が比較的古い民族集団と、ベトナム系や韓国系など移民の時期が比較的新しく、その数が近年急増してきた民族集団を含む、アジア諸国にその起源を持つアメリカ人のことを指す言葉である。少数民族の権利拡大運動が本格化する1960年代以前は、それぞれの民族集団はおのおの別々という意識が強かったが、それ以降、権利獲得のために団結する必要性が高まり、アジア系アメリカ人という枠組の下に結束する動きが生れ、それが現在では一般的に定着している。しかし、それらの民族集団の中で、その文学が研究対象としてふさわしい質と量を備えているのは、最近、映画化され、その映画が日本でもかなり評判になった *The Joy Luck Club* (1989) の原作者Amy Tanをはじめとする中国系の他には日系しかない。⁴⁾

まずここで、日系アメリカ文学を効率的に概観するために、その代表的な作家と作品を年代順に表にしてみる。スペースの関係で、掲載するものは、研究書や書評などでよく取り上げられ高く評価されている作家のみとし、さらに作品についても各作家につき一作品に限定した上で、それに私なりの評価も加えて、次のような表を作成した。

[表] 日系アメリカ文学主要作家・作品 (*がついているものは、本論で論じる作品)

年	主要な作家・作品 [出身地, 世代, ジャンル]
1946	Wakako Yamamuchi, "And the Soul Shall Dance." [California, 二世, a short story, and dramatized in 1974] Miné Okubo, <i>Citizen 13660</i> . [California, 二世, memoirs]
1949	* Toshio Mori, <i>Yokohama, California</i> . [California, 二世, a collection of short stories] Hisaye Yamamoto, <i>Seventeen Syllables and the Other Stories</i> . [California, 二世, a collection of short stories]
1953	Monica Sone, <i>Nisei Daughter</i> . [Seattle, WA, 二世, an autobiography]
1957	* John Okada, <i>No-No Boy</i> . [Seattle, WA, 二世, a novel]
1959	Milton Murayama, <i>All I Asking for Is My Body</i> . [Hawaii, 二世, a novel]
1965	Jon Shirota, <i>Lucky Come Hawaii</i> . [Hawaii, 二世, a novel]
1971	Lawson Fusao Inada, <i>Before the War: Poems as They Happened</i> . [California, 二世, a collection of poems]

1981	Garret Hongo, <i>Yellow Light</i> . [Hawaii, 二世, a collection of poems] Joy Kogawa, <i>Obasan</i> . [Canada, 二世, a novel]
1982	* Yoshiko Uchida, <i>The Desert Exile: The Uprooting of a Japanese-American Family</i> . [California, 二世, memoirs]
1985	Philip Kan Gotanda, "The Wash." [California, 三世, a drama]
1987	Janice Mirikitani, <i>Shedding Silence</i> . [California, 三世, a collection of poems]
1989	Cynthia Kadohata, <i>The Floating World</i> . [Chicago, 三世, a novel]
1990	Karen Tei Yamashita, <i>Through the Arc of the Rain Forest</i> . [California, 三世, a fantastic novel]
1991	David Mura, <i>Turning Japanese: Memoirs of a Sansei</i> . [California, 三世, memoirs]
1992	Sylvia Watanabe, <i>Talking to the Dead</i> . [Hawaii, 三世, a collection of stories] Amy Uyematsu, <i>30 Miles from J-Town</i> . [California, 三世, a collection of poems]

この表に見られるように、日系アメリカ人作家は三つの要素で分類することができる。まず第一に、出身地による分類が可能で、大きく分ければ、西海岸（カリフォルニア州およびワシントン州シアトル）出身の作家と、ハワイ出身の作家に分けることができる。例外的には、シカゴ出身のCynthia Kadohataやカナダ出身のJoy Kogawaがいる（カナダ出身のJoy Kogawaは、厳密に言えば日系アメリカ人作家とは言えないが、その優れた作品は、日系アメリカ文学の中に含めて論じられることが多いため、特例として表に掲載した）。第二に、世代による分類が可能で、1980年代以前は二世作家がほとんどだが、そのころを境に三世作家の活躍が目を見くようになってきた。ちなみに、それ以外の世代、例えば日系一世は、日本から移民してきた人々だったので、当然、文学作品を書くような暇も余裕もなかったろうし、何よりそうするための英語力も持ち合わせていなかった。また、日系四世以降の世代は年令的にまだ若く、優れた文学作品を書くほど、まだ十分に知的成熟を遂げていない。第三に他の文学と同様、文学ジャンルによる分類が可能で、それは回想録、自伝、小説、詩、戯曲とバラエティーに富んでいる。

本論でこれから取り上げる作家は、Toshio Mori, John Okada, Yoshiko Uchidaの三人である。この三人はいずれも、多くの批評家から高い評価を受けている、西海岸出身の日系二世の作家たちである。この三人の作家たちはある共通の体験を持っている。すなわち、この作家たちは、「黄禍論」(yellow peril)に象徴されるような黄色人種に対する差別的風潮が特に根強

かった西海岸諸州で、常に人種差別と向かい合いながら、青少年期を送った。さらに日本軍による真珠湾攻撃がアメリカの一般大衆に決定的な悪感情を引き起す中、1942年の日米開戦に伴い発令された大統領令によって、西海岸諸州に居住していた約11万人の日系住民は敵性国人として強制退去させられ、内陸部の劣悪な環境にある強制収容所に送り込まれた。この三人の作家たちもそのような人々の中にいて、れっきとしたアメリカ国民でありながら、理不尽な扱いを受けた。この強制収容所体験が、西海岸諸州在住の日系二世に決して消し去ることができない心の傷 (trauma) を残したことは、紛れもない事実である。このことは日系二世作家の多くが生涯この体験を引きずり続け、作品の中でそれを頻繁に取り扱っていることから明らかである。

では、この三人の作家の代表的な作品を考察することによって、日系二世文学の顕著な特徴を探ってゆきたい。

2. Toshio Mori, *Yokohama, California* ⁵⁾について

(1) Toshio Mori (1910-80) について

1910年にカリフォルニア州オークランドに生れ、ユタ州トパーズでの3年間の強制収容所生活以外は近郊の田舎町サン・リーンドロ (San Leandro) で、一生を過ごした。彼は、家業の農業に従事しつつも、20代のころから創作活動に意欲を燃やし始め、1949年に出版した初の短編小説集 *Yokohama, California* が、William Saroyanなどに認められ日系作家の先駆者的存在となった。他に長編小説 *Woman from Hiroshima* (1978)、短編小説集 *The Chauvinist and the Other Stories* (1979) がある。

(2) *Yokohama, California* (1949) について

Sherwood Andersonの信奉者だったとも言われているToshio Moriは、Andersonの *Winesburg, Ohio* (1919) を思わせるような⁶⁾、カリフォルニア州の(リトル)ヨコハマという日系人町を舞台に様々な日系人たちが織り成す人間模様を生き生きと描き出した22編の短編から成る短編集 *Yokohama, California* を書いた。その短編はいずれも、1930年代から第二次世界大戦ごろまでの普通の日系アメリカ人たちの日常を人間群像的に描いたもので、なかなかの秀作ぞろいである。ここでは、いろいろなアンソロジーなどに選ばれ掲載されている数編の短編小説を取り上げることにする。

まず、“The Woman Who Makes Swell Doughnuts”では、うらぶれた家に独りひっそりと暮す、すばらしいドーナツを作ることがその人の存在価値そのものとも言えるような老女との出会いと、その死へ向けられた語り手の哀悼の念が描かれている。

また、“The Seventh Street Philosopher”では、Seventh Streetに住む金持ちの老女の家で住み込みの洗濯人として働いているMotoji Tsunodaが主人公として描かれている。彼は、普段は無口だが、哲学のこととなると話は別で仏教僧と宗教論争をしたり、日本から来て講話する

はずだった高名な僧侶が突然来られなくなると、その代役を引受け、堂々と立派な講話をし、聴衆を感心させる。

さらに“Slanted-Eyed Americans”では、日本軍による真珠湾攻撃の直後、日系人への風当たりが厳しくなってきたときにアメリカへの忠誠を示すため、アメリカ人として軍人となっていた日系二世のKazuoが一時外出許可で帰郷するのを温かく迎え、そしてまもなく再び送り出す日系人家族の悲喜こもごもの心境を描いている。

このように、各短編小説の中では、人種差別、太平洋戦争といった社会的・歴史的背景において作り出された厳しい状況の中で、ごく普通の日系人たちがたくましい生きる生き様が朴訥ながらも力強い筆致で描かれている。そして、何より忘れてならないのは、どの短編にもそれらの登場人物に向けられた作者の人間愛が満ち溢れていることである。

William Saroyanは、この作品のIntroductionの中で、Toshio Moriが書いた英語に文法的誤りが多いことに苦言を呈しながらも、Toshio Moriのことを「生まれつきの作家」(“natural-born writer”)であるとか、「重要なアメリカ作家」(“an important American writer”)といった賛辞を寄せている。⁷⁾

Saroyanの指摘の通り、Toshio Moriの飾り気のない文体はときには破格で、決して美しい文体だとはお世辞にも言えないだろうが、Andersonとはまた違った形で、アメリカ社会の小宇宙(micro-cosmos)をその作品の中で作り上げ、そこでアメリカ人として誇りを持ち、たくましく生きる日系人の姿を見事に描き出している。その意味で、Toshio Moriは日系人ばかりを描きながらも、ことさら民族性を強調しようとはせず、あくまでもアメリカ人としての日系人たちを描こうとしているのである。

3. John Okada, *No-No Boy* ⁸⁾について

(1) John Okada (1923-71) について

1923年にシアトルに生れ、第二次世界大戦にアメリカ軍に従軍する。戦後、コロンビア大学で修士号取得後、シアトルとデトロイトの公立図書館で働く。図書館での仕事の合間を縫って創作活動を行ない、1957年、彼にとって唯一の作品となった長編小説*No-No Boy*を出版した。1971年に心臓発作で急死。

(2) *No-No Boy* (1957) について

John Okadaが図書館の仕事をしながら苦勞して書いた*No-No Boy*は、兵役拒否の日系人を描いていたために、当時、他の日系人たちにさえ反米的な作品と見なされ、なかなか出版することができなかった。やっとのことで日本のチャールズ・タトルから出版した初版1,500部は、15年かけても売り尽くせなかったほど不評だった。1971年にJohn Okadaが急死してから数年後、日系詩人Lawson Fusao Inadaらの努力によって*No-No Boy*再評価の動きが出てきた。現在、この作品はワシントン大学出版局から出版され、日系アメリカ文学の主要な作品の一つと

見なされるようになっている。

まず、この作品のあらすじを簡単に紹介する。第二次世界大戦下、強制収容所に収容された他の日系人がアメリカに忠誠を示しアメリカ人として生き延びるための手段として徴兵に応じ次々と戦場に向かった。そんな中、主人公の日系二世の青年Ichiro Yamadaは、日系人に対してアメリカ政府がとった非民主的態度に抗議するため、兵役につくことを拒否し、刑務所に2年間入れられる。戦争が終わり、Ichiroは久し振りに故郷のシアトルに戻るが、兵役拒否者つまり「ノー・ノー・ボーイ」であるために、地域社会の人々からはもちろんのこと、仲間の日系人からも白い目で見られ、つまはじきにされる。食料品店を営む父は、道理がわかる人間だが、気弱でアル中。母は元教師で、特に子どもの教育に関して厳格な人間だが、Ichiroの兵役拒否を誇りに思うほど日本に対する愛国心が非常に強く、日本の敗戦に絶望し自殺する。弟Taroは、兵役拒否をして投獄されていた兄のことを恥ずかしく思い、18才になるとすぐ軍隊に志願入隊する。古くからの友人で戦争で右脚を失い、ついにはその負傷がもとで死んでしまう退役軍人Kenjiやアメリカにも否があることを指摘し励ましてくれるEmiらと再会することで、Ichiroは、自分がしたことについていつまでもとらわれて人生を生きるのはよくないと気付き、目の前に現われ始めたかすかな希望を求めて生きてゆこうとする。特に、Kenjiの死は、たとえ彼のように、戦争で勇敢に戦い、英雄として帰還しても結局は空虚感にさいなまれ、なおかつ、そこでの負傷がもとで死んでしまっただけでは何にもならないことをIchiroに認識させたのだった。

確かにこの作品では、戦時下、強制収容所から生き延びるために徴兵に応じざるを得なかった大部分の日系二世のアメリカ人たちを、兵役拒否者いわゆる「ノー・ノー・ボーイ」の視点から描くことで、特に強制収容というアメリカの非民主主義的一面が指摘されている。しかしながら、アメリカ人としての自分のアイデンティティーを証明できなかった「ノー・ノー・ボーイ」の苦しみは、やはり徴兵に応じた人々よりも大きく、その意味でアメリカの悪い点ばかりをあげつらった反米的作品ではない。「ノー・ノー・ボーイ」は民主主義国アメリカを愛するがゆえに、あえてその不正をただそうとしたのである。この作品では、民族性が強調されているのではなくて、あくまでもアメリカ人としてのアイデンティティーを持つ日系二世たちが、強制収容や国家への忠誠心を試される徴兵という、そのアイデンティティーを根底から揺るがされる危機的状況に直面し、苦悩する姿が描かれている。

4. Yoshiko Uchida, *The Desert Exile: The Uprooting of a Japanese-American Family* ⁹⁾について

(1) Yoshiko Uchida (1921-92)について

Yoshiko Uchidaは1921年にカリフォルニア州アラメダ (Alameda) に生れ、当時の日系人の家庭としてはかなり恵まれた家庭で、温かい家族愛に包まれながら、同じカリフォルニア州のバークレーで育った。彼女は、カリフォルニア大学バークレー校を優等で卒業するとまもなく、戦時下の1942年に発令された大統領令で、家族ともどもユタ州トパーズの収容所に強制収容さ

れる。戦後、東部の名門スミス・カレッジの大学院で教育学を修め、その後、ニュー・ヨークに移り住み、そこで1949年に日本の童話を題材にした、彼女にとって記念すべき最初の本*The Dancing Kettle*を出版し、作家として初めて世に出た。後に、彼女は故郷パークレーに戻って創作活動を続け、1992年に亡くなるまで、主に青少年 (young adults) を対象にした作品を数多く残した。彼女は日系二世としては初めての専業作家である。それだけに留まらず彼女は、講演あるいはラジオ・テレビ・雑誌等のインタビューなどで日系二世女性としての自分自身の体験を若い世代に伝えようとした。また、日本にも1952年から2年間Ford Foundation Fellowshipで滞在して、日本の民間伝承を集め、それをのちに自分の作品の中でアメリカに紹介するなど、日米両国間の文化の「掛け橋」として活躍した。*The Desert Exile* (1982)は、作者の生い立ちから強制収容所体験までを描いた作者の代表作で、回想録とも呼べるような自伝的作品である。他に日系二世少女の強制収容所体験を描いた同じく自伝的作品*Journey to Topaz* (1971)、*Journey Home* (1978) など多くの作品がある。

(2) *The Desert Exile* (1982)について

*The Desert Exile*は、そこに登場する人名や地名などおおむね実名で、また、作品中に描かれていることも事実に基づいており、作者の回想録の一種と考えられる。まず、この作品の大まかな内容を紹介する。Yoshiko Uchidaは、1921年、カリフォルニアの日系移民の家族に次女として生れた。彼女の父Takashiは、大学卒業後、アメリカに移住し、現地の日系商社に勤める有能な商社マンだったが、その一方で家族を大事にする善き夫、善き父親だった。母Ikukoもアメリカに来る前に同志社大学で英文学などを学び、結婚後も家事の合間に短歌を詠み、読書にいそしむ知識階級の女性で、娘のYoshikoが文学を志すようになったのも、彼女の影響である。このような両親と姉のKeikoとともに、Yoshikoは幸せな生活を送っていた。しかし、1941年の日本軍による真珠湾攻撃、そしてその翌年の1942年の日米開戦に伴って発令された西海岸諸州の日系人を敵性国人と見なし内陸部にある収容所に強制的に移転させるという大統領令によって、それまでYoshikoが享受してきた幸せな家庭生活がもろくも崩壊する。住慣れた土地そして家を追われた、その日系家族は、表題の*The Desert Exile* (『砂漠の流浪民』)の如く、砂漠のように荒れ果てた土地から土地へと強制的に集団移動させられる。彼らは、タンフォラン (Tanforan)の馬小屋同然の仮収容所に半年ほど入れられた後、もっとひどい状況のユタ州トパーズの強制収容所にやられ、そこでさらに半年以上の月日を過ごすことを余儀なくされるのである。

この辛く忘れ難い経験は、日系アメリカ人たちにとって理不尽極まりないものであったに違いない。しかし、作者は、自分たちの家族をはじめ日系人たちが逆境の中でたくましく生きてゆく様子を極端な私的感情に左右されることなしに、淡々とした調子で書いている。この作品における作者の基本的姿勢は、日系人のアメリカ人としてのアイデンティティーがアメリカ政府による強制収容によって揺るがされても、それによって日系人としての民族性に目覚め、ア

アメリカに敵意を持つというものには決してならない。むしろ、アメリカの非民主的態度に不満を持ちながらも、彼らは変わらずアメリカを信じ、アメリカを愛し、そして自分たちも変わらずアメリカ人であろうとするのである。この作品のエピローグで、この作品は日系アメリカ人のためだけに書いたのではなく、全てのアメリカ人のために書いた、と作者は述べている。¹⁰⁾ここで作者が示した自らの創作に関する基本的姿勢は、日系だけの文学というの狭い範囲に留まらず、あくまでもアメリカの文学を作り出してゆこうというものだった。

5. 結 語

まず、本論で取り上げた三作品に共通する特徴を考えてみることにする。第一に、作品の題材として、日系アメリカ人たちが取り上げられているということである。従来、WASP主体の文化において、ステレオタイプ化されていたアジア系住民(特に日系人たち)の姿が¹¹⁾、日系作家によって初めて妥当なものに修正され、文学作品の中に提示されたことの意義は大きい。第二に、日系二世の作家たちは、日系人たちが移民当初から歩んできた歴史にとらわれ、自分たちの過去を描くことが多いということである。歴史の流れの中で強制収容所体験や人種差別を受けた体験は、日系二世の心の奥底に心の傷 (trauma) ^{トラウマ} としていつまでも消えることなく残り続け、それらの体験が直接的に作品の中で扱われているかどうかは別にしても、作品の中に何らかの陰を残している。第三にファンタスティック (fantastic) な作品はほとんど見られず、リアリスティック (realistic) な作品が多いということである。戦後しばらくしてから、一般的に日系人の生活状況はWASPのそれと比べると貧しく、生きてゆくだけで精一杯という状況であったために、Yoshiko Uchidaなどを除けば日系の専業作家はほとんどいなかった。こうしたこともあいまって、作品の傾向がリアリスティックなものに偏ったのも無理からぬところであろう。第四に、作品の中で日系二世の主人公は、日本人とアメリカ人の間で揺れ動く二重のアイデンティティー (dual identity) に苦しみながらも、アメリカ人としてのアイデンティティー (American identity) を模索しようとしていることである。Dennis Kawaharadaが指摘しているように¹²⁾、概して日系二世作家は、アメリカの文化・伝統を擁護し、日本の文化・伝統を否定する日系二世を作品の中で描くという手法によって、自らのアメリカ人としてのアイデンティティーを主張しようとするのである。

まさに、この第四の特徴こそ、日系二世作家たちの作品をアメリカ文学のCanonの中に置き直す際に、極めて重要な点である。従来、日系二世作家たちの作品は、たとえ、それがいくら同化主義的傾向を見せようと、アメリカ文学のCanonとは考えられなかった。一方、多元文化主義的傾向を強めつつあるアメリカのアカデミズムにおける文学研究の最近の流れからすれば、このような日系二世の作品が過小評価される可能性も少なくないように思われる。確かにこのようなアンビヴァレントな立場に、日系二世作家たちの作品があることは否定し難い。しかしながら、日系二世の作家たちが、現在アメリカの文学界でにわかに注目を集めつつある日系三世、四世という後の世代の作家たちが活躍するための文学的、精神的、社会的基盤を作ったという

功績を忘れてはならない。

それだけではなく、我々日本人研究者は、日系二世作家の作品の歴史的背景などだけに留まらず、その文学性をも真正面から取り上げるべきである。アメリカで日系アメリカ文学をはじめアジア系アメリカ文学を地道に研究し、その研究をアカデミックなものにまで高めてきたのは、他ならぬ日系および中国系といったアジア系アメリカ人の研究者たちであった。こういったことに鑑みれば、日本人研究者はもっと積極的に日系アメリカ文学を研究し、アジア系アメリカ人の研究者と共にその研究を支えてゆく責務があるのではなかろうか。そして、そのような研究の延長線上に、日系アメリカ文学が、決して容易ではないだろうが、そう遠くない将来、アメリカ文学のCanonとして認知される可能性があることは言うまでもなかろう。ここで一言付け加えて申し述べておくが、もちろん、筆者自身も、このような立場に立ち、これからも微力ながら日系アメリカ文学を研究してゆきたいと考えている。

注

- 1) A. LaVonne Brown Ruoff and Jerry W. Ward, Jr., eds., *Redefining American Literary History* (New York: MLA, 1990).
- 2) cf. Joy Kogawa, *Obasan* (1981; New York: Anchor, 1992); David Mura, *Turning Japanese: Memoirs of a Sansei* (New York: Anchor, 1991); Cynthia Kadohata, *The Floating World* (New York: Ballentine, 1989).
- 3) アジア系アメリカ文学研究会は、植木照代氏を会長とし、事務局を神戸女子大学に置く。会員数は約50名(1994年度現在)。年に5回の月例会(関西地区ならびに東京)と、夏期セミナー(京都)の他、1994年度より刊行が開始された会誌 *AALA Journal* などにおいて活発な研究活動が行なわれている。筆者も1993年度より同研究会会員。
- 4) Amy Tan, *The Joy Luck Club* (New York: Ballentine, 1989).
- 5) Toshio Mori, *Yokohama, California* (1949; Seattle, WA: U of Washington P, 1985).
- 6) cf. Sherwood Anderson, *Winesburg, Ohio* (1919; Harmondsworth: Penguin, 1976).
- 7) William Saroyan, Introduction to Original Edition, pp.1-2 in Mori, *Yokohama, California*.
- 8) John Okada, *No-No Boy* (1957; Seattle, WA: U of Washington P, 1976).
- 9) Yoshiko Uchida, *The Desert Exile: The Uprooting of a Japanese-American Family* (Seattle, WA: U of Washington P, 1982).
- 10) Uchida, *The Desert Exile*, p.154.
- 11) WASP主体の文化が大衆文化というレベルで最も顕著な形で現出したものの一つとしてハリウッド映画がある。ハリウッド映画におけるアジア人のイメージのステレオタイプ化については、次に示す二点の文献に詳しい。Cf. 村上由見子『イエロー・フェイス—ハリウッド映画にみるアジア人の肖像—』朝日選書(朝日新聞社, 1993); 垣井道弘『ハリウ

ッドの日本人―「映画」に現れた日米文化摩擦―』(文藝春秋, 1992).

- 12) Dennis Kawaharada, "The Rhetoric of Identity in Japanese American Writings, 1948-1988," Ph.D. diss., U of Washington, 1988, pp.55-56.

Bibliography

(i) 日系アメリカ人作家作品 (アジア系アメリカ人作家作品のアンソロジーを含む)

Berson, Misha, ed. *Between Worlds: Contemporary Asian-American Plays*. New York: Theatre Communication Group, 1990.

Chin, Frank, Chang Jeffery Paul, Lawson Inada, and Shawn Wong, eds. *Aiiieeeee!: An Anthology of Asian American Writers*. Revised ed. Bergenfield, NJ: Mentor, 1991.

---, eds. *The Big Aiiieeeee!: An Anthology of Chinese American and Japanese American Literature*. New York: Meridian, 1991.

Hongo, Garrett. *The River of Heaven*. New York: Knopf, 1988.

Houston, Velina Hasu, ed. *The Politics of Life: Four Plays by Asian American Women*. Philadelphia, PA: Temple UP, 1993.

Kadohata, Cynthia. *The Floating World*. New York: Ballentine, 1989. [荒このみ訳『七つの月』(講談社, 1991)]

Kogawa, Joy. *Obasan*. 1981; rpt. New York: Anchor, 1992.

Mirikitani, Janice. *Shedding Silence*. Berkeley, CA: Celestial Arts, 1987.

Mori, Toshio. *Yokohama, California*. 1949; rpt. Seattle, WA: U of Washington P, 1985.

---. *Woman from Hiroshima*. San Francisco: Isthmus Press, 1978.

---. *The Chauvinist and the Other Stories*. Los Angeles: UCLA Asian American Studies Center, 1979.

Mura, David. *Turning Japanese: Memoirs of a Sansei*. New York: Anchor, 1991.

Murayama, Milton. *All I Asking for Is My Body*. 1959; rpt. Honolulu, HI: U of Hawaii P, 1988.

Okubo, Miné. *Citizen 13660*. 1946; rpt. Seattle, WA: U of Washington P, 1983.

Okada, John. *No-No Boy*. 1957; rpt. Seattle, WA: U of Washington P, 1976. [中山容訳『ノー・ノー・ボーイ』(晶文社, 1979)]

Shirotta, Jon. *Lucky Come Hawaii*. 1965; rpt. Honolulu, HI: Bess Press, 1988.

Sone, Monica. *Nisei Daughter*. Boston, MA: Little, Brown and Company, 1953.

Uchida, Yoshiko. *Journey to Topaz*. 1971; rpt. Berkeley, CA: Creative Arts, 1985. [柴田寛二訳『トパーズの旅―日系少女ユキの物語―』(評論社, 1975)]

---. *Journey Home*. New York: Atheneum, 1978. [吉田悠紀子訳『ユキの愛する人たち』

(ひくまの出版, 1989)]

---. *The Desert Exile: The Uprooting of a Japanese-American Family*. Seattle, WA: U of Washington P, 1982. [波多野和夫訳『荒野に追われた人々—戦時下日系米人家族の記録』(岩波書店, 1985)]

Uyematsu, Amy. *30 Miles from J-Town*. Brownsville, OR: Story Line Press, 1992.

Watanabe, Sylvia. *Talking to the Dead*. New York: Anchor, 1992.

Yamashita, Karen Tei. *Through the Arc of the Rain Forest*. Minneapolis, MN: Coffee House Press, 1990. [風間賢二訳『熱帯雨林の彼方へ』(白水社, 1994)]

Yamamoto, Hisaye. *Seventeen Syllables and Other Stories*. 1949; rpt. Latham, NY: Women of Color Press, 1988.

山本岩夫ほか編注『日系アメリカ人の心と歩み—短編集』(鶴見書店, 1991).

(ii) 日系アメリカ文学に関する批評 (アジア系アメリカ文学に関する批評集を含む)

Cheung, King-Kok, and Stan Yogi. *Asian American Literature: An Annotated Bibliography*. New York : MLA, 1988.

Cheung, King-Kok. *Articulate Silence: Hisaye Yamamoto, Maxine Hong Kingston, Joy Kogawa*. Ithaca, NY: Cornell UP, 1993.

Fujita, Gayle Kimi. "The "Ceremonial Self" in Japanese American Literature." Ph.D. diss. Brown U, 1986.

Hiraoka, Jesse. "Asian American Literature." *Dictionary of Asian American History*. Ed. Hyung-chan Kim. Westport, CT: Greenwood Press, 1986.

Kawaharada, Dennis. "The Rhetoric of Identity in Japanese American Writings, 1948-1988." Ph.D. diss. U of Washington, 1988.

Lim, Shirley Geok-lin. "Twelve Asian American Writers: In Search of Self-Definition." *Redefining American Literary History*. Ed. A. LaVonne Brown Ruoff and Jerry W. Ward, Jr. New York: MLA, 1990.

Lim, Shirley Geok-lin, and Amy Ling, eds. *Reading the Literature of Asian America*. Philadelphia, PA: Temple UP, 1992.

Ueki, Teruyo. "Obasan : Revelations in a Paradoxical Scheme." *MELUS*, 18.4. (Winter 1993) .

Wong, Cynthia Wong. *Reading Asian American Literature: From Necessity to Extravagance*. Princeton, NJ: Princeton UP, 1993.

※本稿はサウンディングズ英語英米文学会第30回研究発表会(1994年10月7日)において口頭発表した原稿に加筆修正したものである。

付 記

この小論を1994年度をもって鹿児島県立短期大学を定年退職された門田明先生に捧げたい。私事で恐縮だが、門田先生についての私の思い出を少々述べさせていただきたい。門田先生は、私が1990年4月に同短大文科英文専攻に赴任したときの主任教授で、教鞭を執るようになって間もない私をいつも柔和な笑顔で温かく指導して下さった。それ以来、私が1994年3月に同短大を転出するまでの4年間、いろいろとご指導いただいた。

実を言うと、私が日系アメリカ文学に興味を持つようになったのは、門田先生のおかげといっても過言ではない。門田先生が副会長を務めておられる鹿児島サンタローザ友好協会の交換学生プログラムの引率者として、私は1992年の夏に3週間ほど、アメリカに滞在した。その行程でカリフォルニア州のサリナスというところの主に鹿児島からの移民によって作られた日系人コミュニティを訪問した。そのとき、アメリカ文学を研究する者として、私は言い表わせないほどの強い衝撃を受けた。すなわち、そこには、私が全く知らないアメリカがあったからである。それ以来、日系アメリカ人に興味を持ち、資料を集めようとしていた私に、門田先生はご自分で所蔵されていた数冊の貴重な本を快く貸して下さった。さっそく、そのうちの一冊に掲載されていた日系アメリカ人作家たちによる数編の短編を読み、私は新鮮な感動を覚えた。それをきっかけに、私は日系アメリカ文学研究の必要性を痛感し、その研究を志すようになったのである。

今述べたような意味からも、この場を借りて、門田先生に謝意を表したい。また、先生の鹿児島県立短期大学在職中の多大なる功績に敬意を表すと共に、これからの先生の益々のご健勝、ご活躍を心より祈念している。

(1995年5月8日受理)